

光を見し夜、天、黙して我らを忘れたり。  
を詩箋の裏に、納め、後の世に伝え給へたり。  
筆を折り、心、痛む。願わくば、高信公、この書  
の記憶すら、朽ち果て、なんす、ここ、ここに  
り。」「聞き、月、余は知り。貞信も、や、天  
禁じ得ず。曰く、「殿上詠める歌、耳にしに、け、涙を  
だ嘆き深し。余卿、童の詠め、詞、少く、梅、た  
香も絶えぬ。公卿、殿に侍るも、花、無く、管  
弦の調べは絶え。白河殿の、宴は、絶え、梅、の  
離れ給ひしなるべし。今や、詩歌の、御神、宮、中、を  
す。然れども、余は思ふ。天照大神の、徴と、称  
い。は。仏祖の怒りと、称し、神道の驚き、ある  
ず。色無し。香無し。人々の驚き、ある  
ごとく。弓形に掛かる。雲、霞、に、あ、ら、あ、る  
見たり。未明、天延二年、東の空に、一、條の、光、奇、兆、を  
る。藤原貞信、天安二年、四月、藤原高信公に書を奉  
大納言藤原貞信、天安二年、四月、藤原高信公に書を奉